第２５回 JIA 東北建築学生賞 開催と審査経過について

＜期間及び開催場所＞

自　２０２１年（令和３年）１０月２９日（金）開会　12 時 30 分
至　２０２１年（令和３年）１０月２９日（金）表彰式 17 時 30 分から閉会 17 時 50 分
会　場　仙台市市民活動サポートセンター（サポセン）４階　研修室５（審査員の参集場所）
（所在地：仙台市青葉区一番町 4-1-3）
および Zoom によるオンライン開催（作品応募登録者の参加方法）

＜入場者、参加者、応募者等の数＞

審査会場入場者：関係者３５名　　応募作品数：４３点

＜その他行事等の結果＞

「第２５回ＪＩＡ東北建築学生賞」
審査員（敬称略）

審査員長	吉田 和人	（（株）建築工房ＤＡＤＡ．　ＪＩＡ宮城）
審査員	荒内 要	（荒内要建築設計事務所．　ＪＩＡ青森）
	加納 大輔	（加納大輔建築アトリエ．　ＪＩＡ秋田）
	佐々木 則章	（ファクト（株）．　ＪＩＡ岩手）
	井上 貴詞	（（株）井上貴詞建築設計事務所.ＪＩＡ山形）
	邉見 啓明	（（有）辺見設計．　ＪＩＡ福島）
	湯浅 穣	（（株）豊和 仙台営業所．　ＪＩＡ東北支部協力会）
	小島 義弘	（（一財）みやぎ建設総合センター 評議員． （株）建設新聞社 取締役副社長 兼 編集総局長）
	相澤 隆	（東北専門新聞連盟理事長．（株）福島建設工業新聞社 会長）
	浦部 智義	（（一社）日本建築学会東北支部 建築デザイン教育部会． 日本大学工学部建築学科 教授）

協力会特別賞審査員（5 名）

審査員長	リリカラ㈱ 三浦 淳
審査員	（株）デコスタイル 菊池 弘道
	（株）ビジネスセンター 工藤 昌彦
	田島ルーフィング（株）仙台営業所　但木 英子
	大阪ガスケミカル（株） 小林 勝志

＜審査経過報告＞

公益社団法人　日本建築家協会東北支部
事業委員長　櫻井　一弥

JIA 東北建築学生賞は、今回２５回目を迎えました。四半世紀の長期間にわたって続けてこられたことは、ひとえに多くの皆様からのご支援の賜物と、篤く感謝申し上げます。東北地方において建築を学ぶ学生さんや教育機関にとって、本賞が建築界への登竜門となってきたことを改めて感じております。

審査会は、２０２１年１０月２９日（金）に、仙台市市民活動サポートセンター（サポセン）４階研修室５で行われました。１５校（１０大学１大学校１短期大学校３高専）１７学科、４３作品が応募され、白熱した議論を経て各受賞者が決定しました。２５回の歴史の中で最多タイの応募作品数となりました。

今回は、前回に引き続き、コロナ禍における審査ということで、実施の方法について執行部で検討を重ねて参りました。結果として、制作者である学生さんを会場に集めて行う例年の形式は、新型コロナウイルス感染症対策の観点から望ましくないとの結論に至り、学生さんには、遠隔会議ツールである「zoom」を使ってリモートで参加いただくこととしました。審査員は全員会場に参集し、提出された４３作品のパネルを会場に並べて各作品を確認しながら審査を行いました。各作品の画像をzoom 上で画面共有しながら会場でもスクリーンに映し、一作品ずつプレゼンテーションと質疑を行い、十分な作品の読み込みができたと感じています。機器トラブルもほとんどなく、スムーズな運営ができました。

今回も、事業協賛金のご協力を各方面にお願いいたしましたところ、本賞の趣旨に賛同くださった多くの皆様から協賛金が寄せられました。また今回は、総合資格学院様より、コロナ禍で大変な思いをしている学生さんに対する激励として、受賞者の皆さんに奨励金を贈呈していただきました。厚く御礼申し上げます。

最後になりましたが、受賞された皆さん、誠におめでとうございます。また、ご支援くださいました各学校関係者の皆様、および開催にあたって準備をして下さった全ての関係者の皆様に、この場をお借りしてお礼を申し上げます。誠にありがとうございました。

来年度以降も、東北地方にとって重要なものとなりつつある、JIA 東北建築学生賞の継続的な運営に向けて、関係者一同努力して参りたいと考えております。ご支援・ご指導を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

■入賞者・作品（敬称略）

No.は発表順

賞	No	作品名	学校名	学年	氏名
最優秀賞	41	ゆらり　流れ、佇む	東北芸術工科大学　デザイン工学部 建築・環境デザイン学科	4	村山　綾音
優秀賞	19	鼓舞するハレとケ ～伝統芸能の継承による町の活性化～	日本大学　工学部　建築学科	4	伊藤　響介
優秀賞	5	息づく星をまもるために ー林業再生における 「里山循環型シェアホース計画」ー	仙台高等専門学校 総合工学科　建築デザインコース	5	菅野　瑞七
奨励賞 みやぎ建設 総合センター賞	16	教室をもたない音楽大学	東北芸術工科大学　デザイン工学部 建築・環境デザイン学科	4	草刈　咲樹
奨励賞 東北専門 新聞連盟賞	14	記憶の塔	山形大学　工学部 建築・デザイン学科	4	安部　豪人
奨励賞 東北専門 新聞連盟賞	30	蓮池をめぐる木の空間 ―郊外型コミュニティガーデン―	日本大学　工学部　建築学科	4	米山　俊也
奨励賞 河北新報社賞	27	流れと淀みの積層	東北大学　工学部 建築・社会環境工学科	4	鶴岡　稜悟
特別賞	33	Ｆｏｒ　ｒｅｓｔ	山形大学　工学部 建築・デザイン学科	4	吉澤　航平
特別賞	32	ヒサシノ	東北工業大学　ライフデザイン学部 生活デザイン学科	3	荒田 考太郎
特別賞	1	あそびの円庭	山形大学　工学部 建築・デザイン学科	3	長岡　大和

＜後援＞　東奥日報社．秋田魁新報社．岩手日報社．河北新報社．ＮＨＫ仙台放送局．
ｔｂｃ東北放送．仙台放送．ｋｈｂ東日本放送．ミヤギテレビ．山形新聞・山形放送．
福島民報社．福島民友新聞社．東北専門新聞連盟．一般財団法人 みやぎ建設総合センター．
一般社団法人 公共建築協会東北地区事務局．一般社団法人 日本建築学会東北支部

第25回JIA東北建築学生賞　審査結果

※数字は得票数

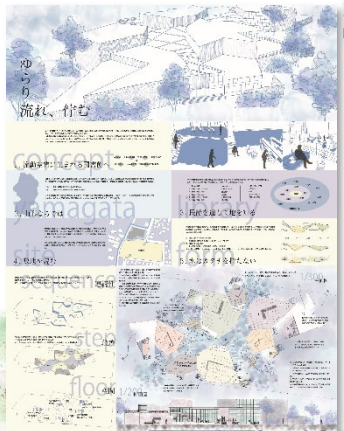
作品番号	1次投票	5.14.16.30で2次投票	5.16で優秀賞選出挙手	23.27で河北新報社賞選出挙手	特別賞審査	賞
1	1				⑤	特別賞
2						
3					2	
4						
5	④	3	6		1	優秀賞
6						
7	1				2	
8						
9						
10	1				5	
11	1				4	
12						
13						
14	④	2			15	奨励賞東北専門新聞連盟賞
15	1					
16	④	3	4		3	奨励賞みやぎ建設総合センター賞
17	1				4	
18					4	
19	⑤				5	優秀賞
20						
21						
22	1					
23	③			2		
24					4	
25					4	
26						
27	③			8	1	奨励賞河北新報社賞
28	1					
29						
30	④	2				奨励賞東北専門新聞連盟賞
31	2					
32	2				⑥	特別賞
33					⑧	特別賞
34						
35						
36						
37						
38						
39						
40					1	
41	⑧				1	最優秀賞
42						
43						

※○は選出作品

※○は選出作品

2021.10.29（金）

第２５回ＪＩＡ東北建築学生賞　公開審査会の様子



第25回 JIA 東北建築学生賞　応募作品毎講評

◆応募作品講評 （吉田　和人）No. 01～07

賞	No	作品名	学校名	氏名	学年
特別賞	1	あそびの円庭	山形大学　工学部 建築・デザイン学科	長岡 大和	3
「30 年後の未来の学校を考える」という設計製図課題に対して、変化するものとして子供の外遊び時間の減少に着目し、「自然の中で遊ぶ」をテーマにし設計している。円を基に建物をデザインし園庭を中心に諸室を配置し、1 部 2 階にしたり吹抜けを設けたり、屋上を利用し空間に変化を持たせようとしたのは評価できる。しかし、自然の中で遊ぶがテーマであれば、単なる砂の校庭と自然を感じるあそび場を現在の円の外側と内側で明確に分け配置するのではなく、もう少しあいまいに、円の内側にも池や畑、川などを配置し、さらには建物の内部にも自然があり、どこにいても自然を身近に感じることができるようにしたほうが、もっと良い案になったと思われる。				
	2	荒浜めぐり	東北工業大学 建築学部　建築学科	秋葉　美緒	2
課題主旨を明確にする必要がある。荒浜というかつては賑やかだった街が震災で災害危険区域に指定されてしまった。そこに 10 年後の未来を創造し、新しい賑わいを取り戻すためのカフェレストランと庭を設計する課題。ピクニックをテーマに地域資源と文化を生かすコースの提案は良いと思う。しかし、設計されたカフェレストランがピクニックを体験できる木陰で憩うカフェレストランであるかは疑問が残る。ピクニックとは本来、自然の中で自然豊かな場所で食事をする行為である。もう少し自然に溶け込んだ建物の内と外をなくすような、建物の存在を消すようなカフェレストランであり、ピクニックの拠点になる建物であればよかったと思う。今後に期待する。				
	3	歩いて、見つけて、生みだして －道をつなぐことによる NEW ビジネスの活性化－	宮城大学　事業構想学群 価値創造デザイン学類	大家　有莉加	4
仙台市青葉区本町二丁目の現況を調査し地区の課題を整理したのち改善策を提示する課題主旨にあるように、地区を調査しコンセプトを立案し設計提案をしているのは評価できる。しかし、実際にある地区を調査して課題を見つけ、建築で解決するために選んだ敷地が、どこであるかがわかりづらいのがとても残念である。またビルが建つ中心市街地であえて 2 階建ての案を提案しているのは少し疑問が残る。さらに、外観のスタディができておらず、建物のデザインを詰め切れていない。プランニングが良くできていそうなだけに残念である。プログラム的にはSOHO的な機能があってもよかったと感じた。敷地選定までのプレセスが良いので今後は建物のデザインにも力を入れてもらいたい。				
	4	あんぽ柿で移住計画	仙台高等専門学校 総合工学科 建築デザインコース	高野　結奈	4
あんぽ柿という地域特有の資源に着目し、それを利用してプログラムを組み立てたまでは良かった。土地の特性も調べ柿の生育には適していないから別の場所から調達してくるなどしっかり調べている。しかし、プログラムどまりであり、「100 人+α のコミュニティセンター」の設計までたどり着いていないのが残念であった。設計の課題だと思うので建物を設計することは大切だと思う。 表現的にはプレゼンのイラストに味があり楽しげで、パット見た感じでわくわくする雰囲気が出ており大変良かった。しかし、説明の文字が小さく、何を書いているかがわかりづらかったのは残念である。相手に自分の考えを伝えるためにはどうしたらよいかを今後は考えてほしい。				

優秀賞	5	息づく星をまもるために ー林業再生における「里山 循環型シェアホース計画」ー	仙台高等専門学校 総合工学科 建築デザインコース	菅野　瑞七	5
「時をかける建築」の課題に対し林業再生とばんえい馬と人の共生文化を蘇らせるために馬をシェアする面白い提案。地域に残る思いれのある小学校をリノベーションして利用する点、馬と共同生活を体験できる点、馬の体温や排せつ物を暖房として使用するなど素晴らしく、体験施設として面白い提案である。プレゼンも考えをわかりやすくまとめてあり、優秀賞に相応しい作品である。欲を言えば、林業が減ってきているのは山にお金が落ちない経済的な理由であり、効率が良いとは言えない馬搬を導入することで林業が再生するとは思えない。林業の一部として重機が入らない場所で馬搬を利用することで、歴史的・文化的価値を復活させるとしておけば、さらに良かったと感じる。				
	6	ｗｉｔｈ　ａｒｔ	宮城学院女子大学 生活科学部 生活文化デザイン学科	菅ノ又　望	3
「住、動、学、遊が出会う場所をデザインする」課題に対して、芸術を切り口に、地域に開かれた場所と連携する屋外空間をデザインし提案している。 すり鉢状に設けた住戸がメゾネットになっているため、2 階が通路につながったセミパブリックなテラスで 3 階がプライベートなテラスになっている点や地域に開放されている中庭は魅力的に感じる。しかし、1 階が創作活動スペースやギャラリーで 2、3 階が住戸という階の構成には面白みが欠ける。古い町並みにあるような家先で物を作り商売をするような感じで、住戸内でも創作活動を行え、地域住民にアピールできるような空間があってもよかったと思うし、もう少し立体的に考えればさらに良い案になったと感じた。				
	7	円で交わる学び舎	東北学院大学　工学部 環境建設工学科	今野　優也	3
特別教室型を採用した小学校の提案。従来からある箱形の片廊下式ではなく、大きなアトリウム空間を中心に求心力のある円形を採用しブリッジを設けるなどして、視線的にも動線的にも行き止まりの無い学校全体で共有できる空間を目指し、学校建築を解こうとしたことは評価できる。 しかし、課題にある地域開放やセキュリティに対してはグランドの地域開放や地域の目によるセキュリティ効果（みまもり効果）など建物外での対策になっており、建築による解決にはなっていないのが残念であった。ダイアグラムにあるようならせん状の物を発展させ、アトリウムや屋外空間、屋上庭園などセキュリティ対策をしながら地域住民に開放できる提案があればよかったと感じた。				

◆応募作品講評 （荒内 要)№. 08～14

賞	No	作品名	学校名	氏名	学年
	8	円の中の通り道	宮城大学　事業構想学群 価値創造デザイン学類	新谷　瑛里	3

この作品は周辺環境に対して非常に素直に解いているという印象を受けた。楕円形のプランの一部を円弧に沿うように歪ませることで、連続性を保ったまま出入口を設けている。また模型も丁寧に製作し、空間をつくろうとしている志を感じる。ただ外観のルーバーに違和感を感じた。本人に質疑したところ、施設使用者に配慮し柔らかく入ることを念頭に置いたようだが、果たしてそうだろうか。この建築は衰退した地方都市の拠点になることを目指している。課題であるシビックセンターというビルディングタイプが成立しなくなっている現代において、地方都市でのシビックセンターの新たな存在のしかたまで踏み込んで、ひとと建物の関係を、境界を通して深く考えて欲しかった。

	9	Ｏｒｉｇｅｎｅ	東北大学　工学部 建築・社会環境工学科	石田 大喜 板谷 廉 金井 凌雅 瀬木 海平	3

難解な課題に対して多人数での設計とはいえ密度とパワーを感じた。敷地の歴史から紐解いてストーリーを巡らせていく流れは卒業設計並みのレベルを感じる。ただそのパワーが空回りしている印象を受けた。私自身学生時代、何を伝えたいのか意味不明なプレゼンテーションを繰り返していたクチなのでよくわかる。まずこの案を説明するには周辺も含めた入念な配置図が必然だろう。そして各住戸のプランと棟どうしでできる隙間が居心地の良い空間なのか、樹木の配置も含めた具体性も。それからこれだけ単位を小さくし搭の形状に固執した理由がわからなかった。都市計画で終わらず部分から全体に対してスケールを横断するような視点を他者に伝えることを念頭に設計すればもっと面白くなる。

	10	架け渡す橋　～Fit～	宮城学院女子大学 生活科学部 生活文化デザイン学科	米田　樹雨	3

暴力的にも見える建物の配置に魅力を感じた。まちと大学を繋ぐコネクターの役割を果たしそうな可能性を持つ配置である。建物下部に道路が通っているため、この建物自体ブリッジのような形状になっていて1階部分のフットプリントは小さい。このブリッジのような形状を最大限まで高める平面、断面計画は無かったであろうか。道路側に対する立面も既視感を否めない。建物が建つ部分だけでなく外部空間も設計すれば、上階への引き込み、長い距離をもったプランを生かした空間のグラデーションや使い方の変化など、初手が良かったためにいろいろ試行錯誤する策があったのではないかと思ってしまう。多様な視点から設計に取り組むと案は深化するので、もっとジタバタして欲しい。

	11	傘の下	東北工業大学 工学部　建築学科	千葉　龍矢	3

傘の形状が強く目を引いた。ただそれが最上階以外、モチーフとしてだけの、構造体に絡まないインテリアということで凡庸さを感じざるを得ない。CG を駆使したパースには傘を通した光の明暗が天井に映し出されている。そして傘の構造自体、入念に計画しているのにもったいない。光の効果を検討して LVL の構造を組み立てているならば、建物自体を傘の構造が連結した建築にして欲しかった。内部の人工の光だけでなく自然光を取り入れた魅力的な空間が出来上がるはずだ。図書館というプログラム上、複雑な構成を傘の構造とともに設計できれば面白い建築が構築できる。もし防火のことなどを考慮しているならば、この際、学生時代は無視して遠くを見て欲しい。

	12	奏でる多様性 － アフターコロナにおける 地方の集合住宅の在り方 －	秋田県立大学 システム科学技術学部 建築環境システム学科	大橋　咲良 二瓶　満里愛 宮澤　真菜	4

かわいらしい俯瞰からの手書きパースが目を引いた。周辺環境に配慮して、商店街側に商業施設を設けたり、開口部を場所によって変化させたりしているようだが、配置と建物形状がこの敷地において正解かどうかの説得力が足りないように感じた。逆に建物形状が先行で、それに周辺環境をあわせるように機能や立面を落とし込んでいるのではないかと感じた。まず周辺環境に真摯に耳を傾けて欲しい。そうすれば自ずと魅力的な建物のかたちが現れるはずだ。それから集合住宅の設計に関わらず住戸プランが軽視されていることが気になった。アクソメから片廊下型になっているようだがアフターコロナの集合住宅のプランを考える事は新たな集合住宅を産み出す発見になる可能性を孕んでいるのだから。

	13	観光交流センターフォピラー	山形県立産業技術 短期大学校 建築環境システム科	岩井　竜也	2

とてもシステマチックな印象を受けた。フォピラーを構成する4つの柱のダイアグラムのまま建築が出来上がっている。それぞれの柱の上下の関係は？柱どうしの関係は？柱と街との関係は？様々な疑問符が溢れてくる。それは設計者自身、この建築に豊かな空間を生み出そうというリアリティを想定して設計していないからなのではないかと思う。建築はひとがいて動いて使って成立する。そしてそれが生き生きしてくるかどうかは設計者次第ということを考えて欲しい。きつい文言になってしまったが、このことをわからないで設計しているプロは多い。閑散としている公共建築が巷に溢れているのがその証明な訳だが、あなたは十分若いし可能性しかないのだから建築に真摯に向き合って欲しい。

奨励賞 東北専門新聞連盟賞	14	記憶の塔	山形大学　工学部 建築・デザイン学科	安部 豪人	4

イメージパースがまず目を引き、またそれぞれの場を丹念に設計していると感じた。このパースで描かれるのはシンボリックな展望塔と壇上のランドスケープである。今課題では新たな公共の劇場が求められている。中心市街地の角地では、段々のランドスケープを生かした劇場が屋外にあっても良かったのではないか。というのはこの塔がいかにも鎮魂かなにかの静けさを保持して存在しているように見えるからである。シンボルという概念、あるいはランドマークやアイデンティティと設計者が語ることは、衰退した地方において本当に必要とされているのだろうか。私自身、衰退しつつある地方都市に住んでいるがそういったものが衰退の象徴に見えてしまうのは気のせいだろうか、考えてみたいと思う。

◆応募作品講評 （加納　大輔）No. 15～21

賞	No	作品名	学校名	氏名	学年
	15	木の洞窟 ～自然と呼応する建築～	日本大学　工学部 建築学科	黒田　大翔	3

一般の人々と現代建築の乖離という問題に対して、この提案からは自然と建築の関係から生まれる豊かな空間体験により、人々への建築への理解を促そうとする意図を感じました。建築的な操作に根拠を持たせながら、その限定された操作の中で、建築内部に様々な空間が生み出されているのが印象的でした。外観や内観のパースは実際に体験してみたいと思わせるような表現となっていると思います。展示館への長いアプローチや池からの水は、ともに引き込んだその先に抜けがないのが気になりました。また、まとまった敷地を分割することもやや唐突な感じがします。地形を読んだ敷地選定やその場所の特徴を生かすことでさらに説得力のある提案になると思います。

奨励賞 みやぎ 建設総合 センター賞	16	教室をもたない音楽大学	東北芸術工科大学 デザイン工学部 建築・環境デザイン学科	草刈　咲樹	4

コロナ後の未来の大学の姿を求める課題に対して、「バーチャルとフィジカルの融合」というコンセプトは、コロナ禍の中で進行しつつある状況を正面からとらえたものだと思います。フィジカルな活動に音楽を設定するという着想は様々なアイデアの源泉となっており、平面・立面計画やパネルの表現にまでその効果は及んでいると思いました。パネルは大半を平面図で占めつつ淡い色調で統一した美しい表現となっています。一般の人々の通り抜けや地域との関係について、さらに検討を加えることでより説得力のある提案になると思います。今回、身体的な活動を音楽という行為に限定したことで得られたアイデアは、ほかの大学や様々な学びの場への適用にまでさらに広げていけるものだと思います。

	17	継往開来　～伝統と生きる～	国際情報工科自動車大学校 建築 CAD 設計科	木村　亜子	2

小学校と伝統の祭りである相馬野馬追を結びつけることで、人のつながり、伝統の継承、地域活性化を促す提案をしています。地域の歴史や現状についてよく調査されていて、この地域における課題や危機感が伝わってきます。大屋根が掛った北側テラスでは、周辺の景色を軒先と床でフレーミングすることで地域の景観の美しさを再発見できるような場となっていて印象的ですが、ここで小学校が 2 つに分かれてしまっていることが気になります。円の分け方を検討することで一体感のある計画になると思います。小学校と周辺の関係がこの提案の特徴となっていると思うので、平面図と配置図を組み合わせて内外のつながりや動線などを表現するとよいと思います。

	18	公と私のグラデーション	宮城大学　事業構想学群 価値創造デザイン学類	鈴木　大斗	3

大学敷地内に 24 人が住む学生寮を 4 人 1 組のシェア型ユニットを中心として計画するものです。スキップフロアや雁行、分離、ずらしなどの建築操作を駆使し、コンパクトな中に公私の関係の度合いが距離によって変わる提案をしています。防音やセキュリティのほか、個室や共用部への様々なアイデアが詳細に検討されていますが、アクソメパースだけではその魅力が伝わりづらいものもあるので平面図との使い分けがあるとよかったと思います。ユニット内の共用 LDK は天井が高く、この寮の中心として特別な場であることが伝わってきますが、高窓だけなので閉鎖的な感じが気になります。この部屋の窓をどう開けるかで公私の関係に新たな展開があるのではないかと思いました。

優秀賞	19	鼓舞するハレとケ　～伝統芸能の継承による町の活性化～	日本大学 工学部　建築学科	伊藤　響介	4
プラットフォームのような空間をつくるという課題に対し、地域コミュニティの存続という社会問題を設定し、単体では弱い地域資源に大胆な操作を加えながら伝統芸能の継承というコンセプトを軸にまとめることで、まちの活性化を促す提案と共に独創的な空間によって答えられていると思います。入口から廃校舎のピロティ、野外舞台へはまるで山門から本堂へ向かうような非日常（ハレ）への軸線が通っており、ピロティ手前の池によってずらされた日常（ケ）の動線と上下の関係で交差することで対照性が際立っています。ハレの空間はこの建築の変化しないものとして、日常の空間は状況に応じて変化していけそうなおおらかさを持った提案だと思いました。					
	20	地域でつくるオフィス	秋田工業高等専門学校 創造システム工学科 土木・建築系 空間デザインコース	小林　葵	5
オフィスで働く人々と市民や県外の人々とのコミュニケーションを誘発する場を、オープンスペースや建物外周を巡る大階段で生み出そうとする提案です。大階段では、オフィスで働く人々がホテルに向かう旅行者から刺激を受けアイデアの源泉とするという提案がなされていますが、この空間ならではの特性を新たに発見していくことでさらなる展開が期待できそうです。らせん状の屋根の植栽は環境への配慮と無機質になりがちなファサードに潤いを与えていて良いと思いました。平面図を見ると家具のレイアウトからさまざまな働き方やコミュニケーションについて考えた形跡がうかがえますので、使われ方や想定したシチュエーション等の簡単な説明を入れるとその空間の特徴が伝わると思います。					
	21	知識の森 ―本が人と場を繋ぐ―	東北工業大学 ライフデザイン学部 生活デザイン学科	阿部　夏実	3
まちなかに大学の郊外キャンパスのサテライトとして、情報発信の拠点を持つ多機能空間と持続可能な界隈を形成する複合施設を求める課題に対して、学びから連想された「本」を媒介として人々が様々な活動の場をつくり出せる森のような建築を提案しています。複数の円を木に見立てそこに人々が場をつくり出すことで、人々の活動と円の集合による造形が共鳴し、楽しい雰囲気を持った界隈が形成されることが期待できます。外観パースに活動の様子も表現されていると雰囲気が伝わると思いました。モノづくりのスペースに本や家具と共に、道具や材料のレイアウトもデザインすることで、本から始まるつながりを一層感じられる空間になると思います。					

◆応募作品講評 （佐々木 則章)No. 22～28

賞	No	作品名	学校名	氏名	学年
	22	辻　～絶えない地域の想い～	国際情報工科自動車大学校 建築 CAD 設計科	太田　郁弥	2
これからの時代に必要となる新しい形の小学校とは何かということを考える課題です。少子高齢化が進み、存続の危機に立たされている小学校に地域のコミュニティの場を作る提案をしています。「辻」というタイトル通り、コミュニティの要所になって欲しいという意欲が伝わる作品です。1 階には小学生と地域住民が自由に使える図書スペース、調理室、特別教室を設け、3 階には祭りや花火などイベント時に利用できるテラスを計画しています。自然豊かな地域環境や地域の特色を教育やコミュニティに活かす検討が掘り下げられると、さらに伝わる作品になると思います。パースの作り込みは、よく出来ていると思います。図面の密度を上げると全体が引き締まった印象のプレゼンテーションになると感じます。					
	23	積むことは知ることである 本八戸駅複合化増改築計画	八戸工業高等専門学校 産業システム工学科 環境都市・建築デザインコース	熊谷　風音	5
街中心部の駅に、まちを知るためのライブラリー機能を有する空間を提案しています。その仕掛けとして、連続する壁状の本棚とそこに展示される移動可能なハコユニットを提案しています。この移動可能なハコユニットが、情報を発信したい人、受け取りたい人、共有したい人によって更新、組み替えられながら、徐々に進化していく様が想像出来、期待感が高まる作品となっています。この建築から情報が溢れ出し、街に浸透していくことによって街全体が活性化されることを願います。ランドスケープにも意識を向けた計画ができると、さらに街の顔となる建築が出来ると思います。設計プロセスの写真やイラスト、全体レイアウト、サイズ感もよく、見やすいパネルに仕上がっていると思います。					
	24	デッキで重なりつながる小学校	秋田工業高等専門学校　創造システム工学科　土木・建築系 空間デザインコース	種倉　栞	5
中心市街地に建つ小学校の在り方を考える課題です。敷地周辺の環境やイベント時の様子を踏まえ、対象敷地にとどまらず、周辺の動線を整理し、デッキを計画している部分が評価できます。小学校本体の計画においてもタイトルに掲げている通り、デッキをひとつの重要な要素として計画しています。コンセプトとしては良いと思いますので、これを具現化するためにデッキのルート、広さ、形状、高さ、建物や屋外との関係、そこで行う活動やコミュニケーションなど多岐に渡って検討を重ねると、計画の説得力が増すと思います。パースの作り込みは出来ていると思いますが、どの場面をどのように見せるべきかは、デッキを中心に検討した内容で変わってくるのではないかと思います。					

	25	共に住む距離	八戸工業高等専門学校 産業システム工学科 環境都市・建築デザインコース	藤田　峻輔	5

市街地と住宅地の境界線に位置する敷地にふたり暮らし世帯のための集合住宅を計画する課題です。周辺状況から片親世帯、兄弟、学生同士のルームシェアという構成を設定し、同居人、世帯同士の距離感に注目して検討を進めています。住人同士の積極的なコミュニティを促す施設というよりは、程よい距離感を意識した計画は現実的だと思います。住戸内をパブリックとプライベートに分けていますが、更にプライベートエリア内の配置についても検討すると適度な距離感が保てる住宅になると思います。プライバシー確保のためにルーバーの間隔を変え、それが外壁のデザインとなっている部分は評価できます。ルーバーの向き、太さなどを変えると更に複雑さや多様性が表現されると思います。

	26	中桜田に居場所を	東北芸術工科大学 デザイン工学部 建築・環境デザイン学科	石井　大智	3

住宅地に学生のための新たな居場所を作り、そこでの学生の活動が地域との交流を生み出し活気あるエリアへ変えていくという提案です。具体的には、古い納屋とその向かいにある公園をリノベーションしてフリースペースを作っています。納屋側は、敷地の空きスペースにテラスを作ることによって活動の幅を広げているだけでなく、内と外の居場所を緩やかに繋げています。このような居場所があったらいいなと思える空間が出来ていると思います。内部での活動が外部からも感じられる工夫があると、更に人が集まりやすい場所になると思います。パースは伝えたいイメージをうまく表現出来ていると思いますし、パネル全体のレイアウトも見やすく好感が持てます。平・立面図の作り込みがもう少し欲しいです。

奨励賞 河北新報社賞	27	流れと淀みの積層	東北大学　工学部 建築・社会環境工学科	鶴岡　稜悟	4

流れと淀みをキーワードとして、都心で小さなギャラリーとカフェを備えたコワーキングスペースを計画する課題です。高低差がある敷地を螺旋状のスロープでつなぎ、それに取り付くように施設を配置する計画は、人の流れと滞留（淀み）がうまく表現出来ていると思います。情報の発信・共有の仕方、コミュニティの形成に至る仕組みに関しても検討を重ねてきたことが想像出来る作品です。現地の調査から問題提起、解決方法の模索、建築計画に至る全てのプロセスにおいてよく検討できていると思います。スロープ、建築物、屋外空間が一体となった造形も評価出来ます。パース、図面、イラストもわかりやすく表現出来ていると思います。大変よく考えられた力作になっていると思います。

	28	Nature Museum － 自然を感じながら巡るミュージアム －	秋田県立大学 システム科学技術学部 建築環境システム学科	菊地　優花	3

街に点在するまちなかミュージアムを散策ルートも含めて提案する課題です。自然環境を街の魅力と掲げ、自然を感じられるミュージアムを提案しています。光、木、水、土というテーマを設定し、テーマごとにギャラリーを計画しています。テーマに応じて場面を想像し、楽しみながら課題に取組んだ事が感じられる作品になっています。4 つのテーマが設定された背景が表現されていない為、唐突な感じがします。街の魅力である自然とは何かということを掘り下げ、建築と自然、自然とアートの在り方についての検討があると作品に説得力が増すと思います。また、4 つの敷地が位置する環境、選定したアーティストの作品との関わりについて説明があると審査員の理解度が上がると思います。

◆応募作品講評 （井上　貴詞）№. 29～35

賞	No	作品名	学校名	氏名	学年
	29	農居 ～親戚が集い 循環するすまい～	東北学院大学　工学部 環境建設工学科	佐藤　光洋	4

仙台市中心部における10世帯の集合住宅の提案である。住まい手はすべて作者の実際の親戚（家系図）から10世帯分抽出し、血のつながりの強い異色の集合住宅を生み出している。農作業が好きな親戚の特性を活かして、農家レストランや野菜の直売、ベーカリーという店舗機能を住機能に併設し、職住一体のまちづくりにもつながっている。血縁関係という人間関係の濃さに比べると、建物自体は鉄筋コンクリート造の無機質で整然とした印象がパースでは強く感じられた。1 階の店舗機能によって住まい手と街行く人をつなげるだけでなく、住民（親戚）同士のつながりを強める共有空間や10世帯の集まり（一つの大きな家）としての個性がもう少し感じられると、より良い提案となるだろう。

奨励賞 東北専門 新聞連盟賞	30	蓮池をめぐる木の空間 ―郊外型コミュニティガーデン―	日本大学 工学部　建築学科	米山　俊也	4

地域の郊外において、長年放置された蓮畑に着目し、それを囲むようにつくったコミュニティ施設である。単なる空間だけ与えるのではなく、地域住民による蓮畑の管理にはじまり収穫・加工・販売・体験など、地域に新たな事業を立ち上げることでハード・ソフト両面でコミュニティの核をつくっていこうという姿勢は実に柔軟で現代的である。木造 HP シェルを連続させた屋根構造も、蓮畑のランドスケープと一体的な美しい景観を生み出している。気になる点があるとすれば、パースに描かれた集会場と蓮畑の間の広場がやや間延びしているのと、建物周辺に広がっているであろう住宅地との関係性があまり感じられなかったところである。

	31	万物の浜辺	東北大学　工学部 建築・社会環境工学科	脊戸川　悠太	4

東京は神楽坂にて小さなギャラリーとカフェを備えたコワーキングスペースをつくる提案であり、「流れと淀み」というコンセプトにデザインを思考している。ここでは、黄色いカラーコンクリートの大階段を敷地に大胆に挿入させることで、地上と地下、既存と新築という二つの対比を生み出している。二つの道が接続し、高低差と既存建物のある敷地の中で、大階段により明るく開放的な居場所と暗い洞窟のような場所など、様々な「淀み」が現れている。タイトルにもつながる浜辺で実際に石を投げ、それが落ちた地点の周りの漂着物や砂を再現するというコンセプトモデルであるが、比較的勾配のある大階段が、なかなか浜辺のイメージとは結びついていない点がやや気になった。

特別賞	32	ヒサシノ	東北工業大学 ライフデザイン学部 生活デザイン学科	荒田　考太郎	3

仙台市中心部に大学のまちなかサテライトをつくる提案である。通りの両側に大きな庇が印象的な建物をそれぞれ設け、その通りに直行する大通りに向かって、庇は2層分の高さとなり人々を迎え入れる構えを見せる。また「静と賑わい」の双方の空間の共存という視点から、平面的には大通りから奥の通りに向かって「賑わい→静」とし、断面的にはカフェやコワーキングセンターのある 1 階からシェアハウスのある 3 階に向かって「賑わい→静」の色分けとなるように空間の機能を配している。外部空間の庇が利用者を自然と誘導しているように、内部空間でも上下階の移動や各階内での移動にあたって「庇」的な仕掛けが展開していると、より幅のある提案になったように思う。

特別賞	33	For rest	山形大学　工学部 建築・デザイン学科	吉澤　航平	4
上山市中心街の空洞化といった現状の課題に対し、上山 HOTEL プロジェクトを計画しその一端として宿泊・飲食・読書といった機能を担う複合施設を提案している。建物は曲線を多用した有機的な形態で、とても伸びやかな平面計画となっている。まちなかに樹木が少ないといった現状の問題点に起因して木をモチーフにした有機的な柱（構造体）で構成されていたり、それぞれの空間も「葉」「木」「うろ」など木に由来する詩的なネーミングと、木質感のある魅力的な居場所が考えられているが、一方でこれだけの敷地面積があるにもかかわらず敷地内に本物の樹木が一本も植わっていないのではないかと思われ、そこに矛盾を覚えたのが惜しい。					
	34	Forest town ～自然との共存空間～	東北工業大学 ライフデザイン学部 生活デザイン学科	宮田　彩那	3
仙台市中心部に大学のまちなかサテライトをつくる提案で、ここでは多世代が自然を身近に感じられる憩いの場をコンセプトにしている。通りを挟んだ 2 つの敷地に分散して置かれた建物には、所々円筒形のガラスが挿入されており、その中に数本の樹木が植わっている。それにより建物内でも手に届くような位置に自然を感じることができるような仕掛けとなっており、訪れる人にとってはカウンター席や座れる階段などさまざまな形で接する機会が用意されている。この提案の自然の取り込みは、あくまでガラス越しの視覚上のみのものであるが、音や匂い、空気の肌触りなど、他の五感を使っても自然を感じられる工夫があるとなお良かった。					
	35	分散する庭 ～光差し込む空間～	秋田県立大学 システム科学技術学部 建築環境システム学科	菊地　小雪	3
大学構内に学生向けのワークショップ棟と地域開放を想定したギャラリー棟をつくる提案である。木造トラスや格子状の耐力壁が特徴的なワークショップ棟では、ハイサイドライト等から射し込む光で明るく保たれ、機能的で使いやすい平面となっている。一方で平屋のギャラリー棟は市松状に庭と建物がズレながら配され、イベントスペースと貯雪ピットを兼ねる中庭が分散して現れている。中庭に雪を落とすための建物の屋根勾配としてはかなり緩いのが気になったのと、雪を貯めるにしてもイベントスペースにするにしてもそれぞれの中庭がけっこう狭いのが気になった。また周囲には広い駐車場もある中で、わざわざギャラリー棟の中庭で雪を貯める意図についても何かしら言及があると良かったように思う。					

◆応募作品講評 （邉見 啓明)№. 36～43

賞	No	作品名	学校名	氏名	学年
	36	冒険スキーヤーM氏の記念館	八戸工業大学 工学部 土木建築工学科	三浦 璃乃亜	3
冒険スキーヤーM 氏のための記念館の計画である。山並みをイメージした方形屋根の3つの展示室を湖畔に面して分棟配置している。左右の展示室は少し角度を振って配置され、四方がガラス貼りにされた開放的な空間イメージとなっている。発表者の説明によると、角度を振ることで、その先に見える豊かな眺望を確保したいとの事であった。パース表現において、その豊かな眺望を表現して欲しかったと思う。展示室とは対照的に、背景となるレストラン、エントランス、事務室のボリュームは陸屋根である。その意匠に積極的な意味を見出せなかったことが少々残念だ。雄大な自然を愛し、果敢な挑戦をしてきた M 氏の理念を象徴するような施設の在り方や意匠性について、更に掘り下げて欲しかったと思う。				
	37	学びと暮らす	秋田工業高等専門学校 創造システム工学科 土木・建築系 空間デザインコース	後藤 汰良	5
コロナが収束した後の在宅勤務やテレワークを行う社会人をターゲットとした集合住宅の提案である。コモンスペースを中心に2階建ての住戸が配置され、コ・ワーキングスペースが各住戸を繋ぐ位置にある。1 階のピロティ空間は、住人の趣味嗜好などアトリエ的な場所にもなるという。タウンハウス型の施設構成が、敷地周辺の街並みや都市的なコンテクスト、冬の厳しい気象条件に合っているか否かは別として、低層低密の集合住宅は、コロナに象徴される予測不能な社会における住まいの一つの方向性であると感じた。高層高密で逃げ場の無い住まいよりも、低層低密で地面に近く、程良く隙間のある住まいの方が、予期せぬパンデミックや災害に対応し得る『撓やかさ』を持つのかも知れない。				
	38	学びを学ぶ学校 ～本の虫たちのすみか～	国際情報工科自動車大学校 建築 CAD 設計科	樽川 広弥	2
読書スペースを中心に配置した学校の提案である。平面的にも断面的にも学校の中心に図書スペース（本の虫ホール）を配置した、云わば、ワンイシュー（単一論点）型の提案である。生徒たちが本の虫ホールにある本と出合うことで、見える世界、届く世界が変わるというコンセプトである。パースを見ると、階段状の空間を両側から本棚が挟む構成となっている。本の出合い方、接し方は人によって様々である。立って読む、座って読む、寝転んで読む、流し読みする、連載をまとめて読む、好きな人と読む、等々。ワンイシュー型であるからこそ、様々な本と人との出会いを演出し、場面を生み出し、想像させ、本棚の在り方を拡張させるような提案について、更に探求して欲しかったと思う。				

	39	Miyagi Manga Museum	東北学院大学 工学部 環境建設工学科	小野寺 悠人	3
マンガミュージアムの提案である。コマ割りからイメージされたアウトフレームのような構造体と、内部に入れ子に配置された展示室の構成が特徴的である。外部からアウトフレーム越しに内部の壁が見える構成は、街行くマンガに関心の無い人でも目に付き、視覚的な効果が期待できる。一方、内部の展示室と廊下の構成が単調で、展示室同士の繋がりや、廊下幅の必然性に疑問符が付いた。また、断面的に各展示室の天井高さが均一であるため、変化をつけるなど工夫の余地はあると感じた。今や、世界規模でその価値が浸透し、日本を代表する文化となったマンガ。取り上げたテーマが大きい分、コマ割りだけでなく、各国の言葉の壁をも超えていくような、ダイナミックな提案として欲しかった。					
	40	MEGURI	宮城学院女子大学 生活科学部 生活文化デザイン学科	吉野 瞳	4
新たな食のスペースの提案である。20年後は共働き世代、単身世帯、高齢者世帯がより増加することを見越し、共同で利用できる食のスペースを確保することで活気を取り戻したいという計画である。2棟構成とし、各棟をスキップ的に繋ぐことで、斜め方向の繋がりを生み出している。平面構成は、四角い平面に対して斜めに階段や吹抜けが配置された大胆な計画である。空間構成の面白さ、軽快さが感じられる一方、取り上げたテーマに対してのリアリティの追及をして欲しかったように思う。例えば、昼間と夜間の食のスペースのイメージの具体的な違いや、多世代間の食のスペースを介した交流など、更に明快に表現できれば作品の印象も変わったのではないかと思う。					
最優秀賞	41	ゆらり 流れ、佇む	東北芸術工科大学 デザイン工学部 建築・環境デザイン学科	村山 綾音	4
新たな図書館の計画である。全体的にバランスよく、美しい作品である。民話を中心に、波紋のように他分野へと広がりを見せる空間コンセプトが明快だ。敷地選定も秀逸だ。西側を流れる水路と、図書館に流れる静謐な時間がシンクロする。提案書の色彩や表現も巧みだ。透き通った水の流れの中に、大小の言葉が浮遊している。人（私）が自然と図書館へ誘われ、本のページをめくるようにシークエンスが展開し、物語の扉が開かれていく想像が出来る。惜しむらくは、下段の3D パースの粒度が、少々粗く、無機質に見えること。また、中心を通る空間上部のガラス屋根について、完成度が高い分、梁の掛け方やスケールが気になること。最優秀に敬意を表すとともに、今後の活躍に一層の期待を込めたい。					

	42	0.8mが生み出す環境	東北工業大学 工学部　建築学科	井上　大輔	3
0.8mの段差が特徴的なオープンスクールの提案である。2階にある1～6年生教室が 0.8m毎に階段状に連なっていく。壁で閉鎖的に仕切るのではなく、段差を設けることで開放性を確保しつつ、緩やかに仕切りたいという提案者の意図には共感する。各教室と廊下との間は開放されているが、幅4.5mの段差上の廊下の使われ方やアクティビティの表現があれば、更に良かったのではないかと思う。また、段差を設けることで生まれた2階のスペースに地域開放エリアを設けているが、生徒が使用する外部空間との間は柵で仕切るとされている。柵も壁と同様の『仕切り』と捉えるならば、柵ではない緩やかな仕切りの在り方を研究し、取り入れる試みがあっても良かったのではないかと思う。					
	43	ワーク・ライフ・ハビタット	仙台高等専門学校 総合工学科 建築デザインコース	佐藤　果穂	5
新たなコ・ワーキングスペースの提案である。手書きの鳥瞰パースから、この場所の伸びやかさ、ゆとりある時間のイメージが伝わってくる。時間に追われるワークと、広大な田畑が生み出す開放的で牧歌的な新浜地区のロケーション。この対照性（ミスマッチ）が、寧ろ、この作品の印象を強めているように感じる。ストローベイルハウスと呼ばれるローテクでバナキュラーな小屋が点在する。内部は休憩スペースや個人的オフィススペースになる。インターネットさえ繋がれば、どこにいても仕事が出来る時代。今までの建築的価値は、物理的にハイスペックな空間的価値であった。これからの建築的価値は、ロースペックでも、豊かで充実した時間的価値を如何に創造するかということなのかも知れない。					

第２５回 JIA 東北建築学生賞　全体講評

◎審査員長　吉田　和人（JIA 宮城）

初めに、様々な学校で建築を学ぶ 43 名もの学生により行われた第25回ＪＩＡ東北建築学生賞。コロナ禍の影響もありＺＯＯＭによる審査会となしましたが、運営側の準備、学生の対応もよく滞りなく開催できたことに感謝申し上げます。

今回の応募作品はシェアリング、コミュニティー、リノベーション、地域交流など現代における問いに関する課題が多かったと思われます。それに対する学生の様々な提案があり大変楽しい審査会でした。さすが各学校から選ばれただけあり、優秀な作品が多く絞り込むのに苦労しました。上位に選ばれた作品は、空間の体験や実際に物事を体験するなど、体験をすることにより課題解決するためのアイデアに優れていたと思います。選ばれなかった学生も質疑応答に素早く答えることができていたのでしっかり自分の案を考えているのがよく分かりました。少し残念だったのが、プランやプログラムで終わっており、建築の形態や外構（ランドスケープ）の設計まで詰め切れていない作品が多かったのと、ＣＧに頼りすぎて、模型を製作していない学生が多いのが気になりました。模型は実際に手を動かして製作していくため、スケール感などがわかる貴重なツールですので、是非たくさん作ってほしいです。

最後に、現在はＳＮＳの普及により個人に焦点が行きやすい時代になり、建築家として活躍できるチャンスが増えてきています。今回の学生賞での評価と学校での評価、他の審査会での評価は違うかもしれません。選ばれた方は慢心しないで、選ばれなかった方は諦めず、両者とも今後さらに修練し社会に貢献できる立派な建築家を目指してほしいです。

一緒に仕事ができる日を楽しみに待っています。

◎審査員　荒内　要（JIA 青森）

今回初めて JIA 東北建築学生賞の審査に参加させて頂いた。日頃学生と接する機会が無いので今の学生が何に関心を持っているのか楽しみに審査に挑んだ。欲を言えばコロナ禍でなければ、対面でのプレゼンテーションで学生の設計に対する熱量を感じたかった。

まずプレゼンテーションボードを見て残念に感じたことから述べさせて頂きたい。

周辺環境を踏まえた配置図が非常に少ないこと、それも方位すら入っていない。これは問題だと思う。私達は地球上のどこかに何かを設計するのだから、風景をつくるという意識をもってもらいたいし太陽を考えない設計などありえない。それから一点突破型の案が多いと感じた。コンセプトがひとつという意味ではなく、設計手法が仕掛けひとつでなんとかやってしまおうという案が多いということである。空間の中でのひとのふるまいが生き生きしているかを意識しながら、最後まで右往左往して設計を

積み上げて欲しい。
その中で最優秀賞の「ゆらり流れ、佇む」は水の流れをヒントに人のアクティビティを平面と断面に連動させているのが秀逸であり、試行錯誤の後が垣間見え好感を抱いた。奨励賞の「教室をもたない音楽大学」は細分化されたレッスン室やホールが散りばめられて学内の至るところで音楽が響き渡ることに魅力を感じる一方、外部空間をもっと丁寧に設計していたらと感じた。「万物の浜辺」は選外になったものの最も印象に残った作品だった。流れと淀みという抽象的な課題に階段という異物を挿入する事で鮮やかに解いている。階段の裏表の空間は、偶発的にも見える既存の大谷石の擁壁との隙間や階段にめり込む既存住宅の梁を露わにし、不思議な魅力を持っている。

◎審査員　加納　大輔（ＪＩＡ秋田）

今回初めて審査員を務めさせていただきました。講評会を通じて心に残った印象は、今回応募された学生の皆さんは、とてもポジティブだったということです。複雑な課題に対して、どの作品も正面から粘り強く取り組んだ跡がみられ、明るい未来を描こうとする提案が多く好感がもてました。２分という短いプレゼンテーション、しかもリモートで行われた中で、自分の伝えたいことをしっかりと言葉でも表現できていた作品は受賞につながるものでした。また、今回の受賞作品に通じていると思うことは、課題の読み取りを超えて、独自の着想や問題提起を経て、アイディアを昇華し表現できていたという点です。
プレゼンテーションボードの表現としてはCGによるものが多く、説明がなくとも伝わってくる作品がある一方、見た目は美しいのですが本来伝えたい内容から遠ざかってしまっているものも見受けられました。また、今回模型を用いた作品が少なかったのですが、採用した作品は物として直接見ることでしか気づけない細やかな検討がなされていたと思います。言葉として表現される一歩手前まで描かれた形が格闘の跡として、忘れられたように残っているものも多くみられました。今回、自分が提出した作品を少し時間が経ったのち、眺めてみてください。その形跡が、今後の新たなアイディアに繋がっていくと思います。

◎審査員　佐々木　則章（JIA 岩手）

昨年に引き続きリモートでの開催となりました東北建築学生賞でしたが、参加された学生の皆さん、大変ご苦労様でした。皆さんには２分間の発表と３分間の質疑応答をしていただきましたが、しっかり事前準備を行い、臨まれたことが伝わるプレゼンテーションでした。課題に対していろいろなことを検討し、考えたことと思いますが、その考えを時間内で伝えることは大変難しいことです。更に、わかりやすく相手に伝え、理解してもらうということは非常に難しく、私にとっても課題のひとつです。それが出来ていたことに大変感心しました。
今回応募された作品は、非常に完成度が高い作品が多いと感じました。敷地調査から

問題提起、それを解決する為の手法検討、コンセプトの導き出し、そしてそれを具現化する建築計画に至る一連の流れがしっかり表現されていました。プレゼンパネルにおいては、パース、模型、スケッチ、写真、ダイアグラム等細部にわたって作り込まれている印象を強く受けました。自分が思い描く世界観が表現されている作品も多かったと思います。入賞作品とそれ以外の作品の差は、各部における説明の密度やコンセプトに対する検討量だったと思います。わずかな差だと思いますので、思ったような評価が得られなかった方も気を落とさず、各学校の代表であることに自信を持って今後も課題に取り組んでいただきたいと思います。課題に直接関係がなくても、旅をしたり、イベントに参加したり、本を読んだり、仲間と議論したりといろいろな事にチャレンジしてみてください。これらの体験を通して新たな知識や経験を増やすことが出来る建築はとても楽しいものです。

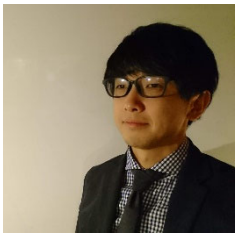
◎審査員　井上　貴詞（JIA 山形）

一昨年に続き、今回で二度目の審査員を任せていただいた。近年大学におけるCGパースによるプレゼンが増えてきたように感じていたが、コロナ禍でオンライン授業を余儀なくされたこともあり、それが当たり前のスタイルとして完全にプレゼンツールが切り替わったのを実感した。PC上でうまくやれば、テクスチャーも色合いも自由に試しながら様々なかたちをつくっては壊しの繰り返しができるので、模型をつくるよりも圧倒的な量を試行錯誤できるのは大きい。逆に言うと、簡単に空間を立ち上げられてしまうので、あまりスタディしていない（検討の手間がかかっていない）提案はすぐバレてしまう。

今回の審査は、審査員間（特に各地域会の建築家）の評価がそこまでばらけなかったような気がする。最優秀賞の「ゆらり　流れ、佇む」は流動空間というコンセプトが違和感なく建築物に昇華され、魅力的なビジュアルと共にバランス良く提示されていた。優秀賞の「鼓舞するハレとケ」は地歌舞伎にかける作者の思いが伝わるような軸組模型写真がメインに据えられ、同じく優秀賞の「息づく里をまもるために」は一貫してフリーハンドの図面やスケッチによって馬と人の新たな暮らしの形を描いてみせた。

大事なのは賞に選ばれることだけでなく、今回の審査のために元々の提案をブラッシュアップしたり多くの人に伝わるように表現を変えてみたりといった思考のプロセスもまた今後の自らの糧になり得る。これは学生だけでなく、我々建築を生業にしている者でも全く同じだ。建築は、一度つくったらそれで終わりではなく、時を経ながら人に伝えたり他人の目を通して見ることで多様な側面が現れてくるものである。ぜひ自分の提案を見限ることなく、何度でも見返して改良をし続けてもらいたい。

◎審査員　邉見　啓明（JIA 福島）



４３作に上る提案書の束は、分厚く、重かった。その分厚さ、重さは、学生一人一人の意欲と熱意の賜物と感じた。作品を通して、現代社会が抱える問題、これから先の未来等、過去・現在・未来を見つめ、考える機会となった。大変興味深く、楽しく、各提案を拝見した。ヒアリングを通して、当初の評価が覆った作品もあった。言葉で伝えることの大切さを改めて感じた。このような貴重な機会を与えて頂いたことに深く感謝するとともに、発表された学生全員に敬意を表したい。

以下、全体を通して感じたことを述べたい。今回の学生賞で（私の）評価の高かった作品は、『伝える力』と『届く力』があったものだと思う。『伝える＝表現力』、『届く＝共感力』である。私自身、今まで数多くの学生コンペやプロポーザル参加を通じて痛感していることだ。作品の評価を得るためには、先ず、評価する人（他者）の目に留まらなければならない。目に留まるためには、豊かに『表現』しなければならない。しかし、それだけでは足りない。人の心に届かなければならない。人の心に届くには、『共感』させなければならない。提案に没頭して豊かに表現したとしても、人は共感してくれるとは限らない。持ち得る想像力を膨らませ、共感を引き出さなければならない。時には即興のスケッチ、ジェスチャー、言葉等を駆使して。アイディアコンペと同様、今回の学生賞は、実際の建築の実現を前提としていない。しかし、先ず、自分のアイディアを豊かに表現し、共感させる力がなければ、建築の『出発点』にすら立てない。連戦連敗の自戒とともに、学生諸君には、自分の手を動かし、思考し、伝え、人に届ける努力をして頂きたいと切に願う。

◎審査員　（株）豊和 仙台営業所／湯浅 穣 （ＪＩＡ東北支部協力会）

前年に引き続きコロナ禍でオンラインによるリモート開催となりました。発表する皆さんが難しいと思われていると感じられるところもあったのですが、自分の考えを述べることが出来ており、皆さんの努力が伝わってくるものばかりでした。忙しい学業生活の中で、積極的に課題に立ち向かわれたことに心から敬意を表したいと思います。正直に申し上げて未熟さが感じられるところもあったのですが、チャレンジする心を持ち続ければこの応募も含め、あらゆることに上達していくことが出来ると思いますので、今後とも是非頑張っていただきたいと思います。

受賞された方々は、自分の考えをしっかり持って、それを的確に表現できていると感じました。また、短い口頭プレゼンも表現すべき主張が確立されて理解しやすいものになっていました。最優秀賞、優秀賞の３作品は、いずれもこのポイントを高いレベルで満たすものであったと思います。

受賞作品以外にもユニークさや面白みを感じさせてくれる作品がいくつもあり、選に漏れた皆さんも是非次の機会に頑張っていただきたいと思います。

私にとりましても、いろいろな作品に触れることができたのは大変貴重な経験であったと思っております。この機会を与えていただいたＪＩＡの皆様にお礼を申し上げ、講評とさせていただきます。

◎審査員　小島 義弘 （（一財）みやぎ建設総合センター 評議員.
（株）建設新聞社 取締役副社長 兼 編集総局長）

コロナ禍という閉塞感が漂う昨今だからこそ、建築デザインや都市計画に若い学生たちの斬新な発想が求められている。今回の４３作品はどれをとっても次世代を先取りした意欲ある新鮮な作品が提出され、若者たちの想像力の逞しさに時間を忘れて審査をさせていただいた。
審査の中でひとつ気になったのが、コロナ禍のために対面で審査ができず、プレゼンがリモートとなったため、学生たちの表情や意気込み、熱意を直接体験することができなかったことである。せっかくのいい作品がマイクを通しての音量の高低や透明度の関係で審査員への印象度が変わってしまい、作品の評価に影響があったケースも多々あったように思えた。
今回、設計公開審査で感じたことは若者たちの持つ思考力のポテンシャルの限りない広さと深さに感激したことである。建築は社会を変える力を持っている。そこには一生をかけて取り組む価値がある。今回参加された学生の方たちには建築の可能性を信じて、この道を志し、是非ともこの業界で活躍していただきたい。

◎審査員　相澤　隆　（東北専門新聞連盟理事長.（株）福島建設工業新聞社 会長）

予算の制約がなく夢や希望を自由に描ける舞台だけに、デザインや空間性などクオリティの高い、意欲あふれる作品が多く、非常にうれしく思いました。
ただ、応募作品は「各教育機関の設計課題で制作した未発表の建築設計」であり、テーマや設計主旨がさまざまなため、優劣を決めるのに非常に苦労しました。
審査に当たっては ①コンセプトの導き方 ②社会性・歴史性 ③空間性・造形力 ④表現力ーを基準としつつ、ほかの審査員の方々は第一線の建築のプロがほとんどですので、私の場合は独創性のあるもの、将来性を感じさせるもの、さらに「自分が施主だったら、どの作品に魅力を感じるか」という視点を加えて評価をさせていただきました。
公開審査は、コロナ禍のためＺｏｏｍによるオンライン開催となってしまいましたが、発表者の皆さんは２分間という限られた時間の中で、熱のこもったプレゼンテーションを行い、また、審査員からの質問に対しても的確に回答されるなどレベルの高さを感じるものでした。
　近年、公共建築の設計者選定でもコンペやプロポーザルなど、価格競争によらない調達手法が増えてきており、企画力や提案力が求められてきています。今回の体験は皆さんにとっても良い経験になったのではないでしょうか。
　建築は時代の世相や文化と共に移りゆくものです。多様性、ＳＤＧｓといった世の中の動きや社会的要請にも目を向けていただき、視野の広い活動を続けられることを期待します。

◎審査員　浦部 智義 （(一社）日本建築学会東北支部 建築デザイン教育部会.
日本大学 工学部 建築学科 教授）

新型コロナ感染防止の観点から，審査会場と各応募者をオンラインでつないでプレゼンテーション及び質疑応答を行う審査形式でしたが，応募者のオンライン上での慣れた発表と質問の受け答えに，作品の内容とは別に漠然とした期待を感じた審査会でした。応募者が，（審査員側の思いとは正反対に？）細やかな表情や雰囲気が読み取れないことに歯がゆさを感じず，逆にやり易さを感じ，自分の考えを冷静に伝えることが出来ていたとしたら。実現はしない課題作品をオンラインで説明し伝える 2 段階のリアリティーの持ち難さはあるにしても，恐らく最も期待されているであろう，従来の建築（学）の枠組みを越える「学生らしい何か」を引き出せる方法かも知れないとも思いました。
さて一方，今回の作品は，コロナ禍での課題で提出物の制作もままならない状況であったことは想像に難くないですが，入賞された作品も含めて CG やスケッチの美しさが目立った一方で，模型などによる力強い表現への物足りなさを感じた面はありました。オンラインだからこそ，未だ今の所は，先のリアリティーを補完できる様な力強い表現が必要に感じたのかも知れませんし，審査する側が従来の枠を越えて試されていたのかも知れません。
各校の課題とそれに応える素晴らしい作品を沢山見ることが出来て有意義でした。高学年が多く新機軸に挑戦するのが難しいためか，数は少なかったですが住まいに関する提案も勉強になりました。

◎特別賞審査員長　三浦　淳（(公社)日本建築家協会東北支部協力会. リリカラ(株)）

第２５回ＪＩＡ老北建築学生賞も無事に開催できた事、大変嬉しく思います。進藤支部長、吉田審査員長他各地区代表の審査員の皆様、司会進行櫻井様、そして協力会と事務局の皆様に深く感謝申し上げます。私は、協力会から選ばれ昨年は特別賞審査員、今年は特別賞審査員長としてこの東北建築学生賞の審査会に携わることができました。昨年に引き続きリモートでの開催となり、司会進行役の手腕と応募して頂きました学生の皆様のご協力無では、このように無事開催できなかったと強く思っております。
最優秀賞、優秀賞、そして奨励賞を受賞の皆様、大変おめでとうございます。また、私たち協力会審査員により決定いたしました特別賞の皆様おめでとうございます。審査会場とは別室で行い正賞と異なる視点での評価をさせて頂きました。木のイメージをどのように長期保存させていくか？また、屋外、半屋外での適合性素材など想定したりと各企業様の将来の新製品開発として、いろんな視点から勉強させて頂きました。特別賞選定した経緯が、正賞のように ZOOM 上で加点状況がリアルに伝わらず、結果だけが流れてしまった事、誠に申し訳ありませんでした。これからもこの審査会が、長期に渡り開催できるよう多少なりとも支援していきたいと思います。